



市会 関 勝則  
議員 せき かつ のり

「地域のチカラ」を、  
提案・実践。

◎委員会報告◎  
<http://関勝則.com>

水道・交通委員会報告

# 近代水道 創設130年

新年度を迎えた5月17日に横浜市会に設置されている8つの常任委員会が一齐に初委員会を開きました。今年度、私は初めて水道・交通委員会に副委員長として所属します。まずは両局の事業概要についてお伝えさせていただきます。

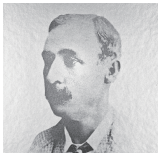
水道局 事業概要

横浜の水道は、明治20(1887)年10月17日に日本初の近代水道として給水を開始し、今年で130年を迎えます。市内では様々な記念行事が行われ、市民の方々に水道をより身近に感じていただける取組みを進めます。

- ①安全で良質な水：山梨県道志村の水源林の管理・保全や相模湖及び津久井湖におけるアオコの増殖(水道水のカビ臭原因)抑制に取り組む。西谷浄水場の再整備を進めるとともに、小雀浄水場の設備を更新する。
- ②災害に強い水：熊本地震を教訓とした災害対応力の強化を図る。市内134か所にある災害用地下給水タンクの他に、飲料水を供給できるよう耐震給水栓を設置する。総延長9200kmの送・配水管のうち老朽化した配水管を更新。
- ③充実した情報とサービス：水需要の8割を占める家庭の水利用実態を把握し、今後の水需要予測や広報ツールに活用する。ちなみに平成14年度調査では、風呂35%・洗濯21%・台所20%・トイレ15%となっている。
- ④国内外における社会貢献：各種作業(メーターの分解作業、施設内の除草等)を障害者就労施設へ積極的に発注。市内中小企業との技術力向上連携を図り、海外においては水事情の改善や技術支援に取り組む。

メモ1

横浜の水道は英国人技師ヘンリー・スペンサー・パーマー氏の指導により、明治18(1885)年に相模川と道志川の合流地点を水源に水道の建設に着手、日本初の近代水道として明治20年10月17日に給水を開始。以来、震災や戦災を乗り越え、人口増加や産業発展に伴い急増する水需要に合わせ、水源開発と8回におよぶ水道施設の拡張工事を行い市民の皆様へ供給しています。



交通局 事業概要

交通局では、平成33(2021)年4月に迎える市営交通100周年を見据え、今後も職員が規律を守るとともに、お客様に信頼されるサービスを提供し続けられるよう交通機関としてのプレゼンスを高めていきます。

- ①自動車事業：市営バスの車両数は815両、営業キロ数は510kmで一日平均34万人が利用。年間収入を2043000万円と見込み、既存路線バスの他に需要の見込める路線の新設検討や貸切バス事業を拡充する。
- ②高速鉄道事業：市営地下鉄は、ブルーラインの車両数228両、営業キロ数4kmで一日平均53万6000人が利用。グリーンラインは68両、営業キロ数13kmで14万4000人が利用。年間収入は合わせて431億8000万円を見込んでいる。
- ③安全性の向上：【バス】新型ドライブレコーダーの導入等【地下鉄】シールドトンネル補修工事、ブレーキの改良等
- ④利便性の向上：【バス】運行管理システムの改修、タブレット型バス接近表示器の設置等【地下鉄】グリーンラインのダイヤ改正、多目的デジタル案内板の設置等
- ⑤快適性の向上：【バス】バス停ベンチ・上屋の更新・新設、駅前バスターミナル上屋の改修等【地下鉄】駅の冷房化、エレベーター等の更新等
- ⑥バリアフリー：【バス】ノンステップバスの更新【地下鉄】横浜駅段差解消、上大岡駅エレベーター増設等

メモ2

横浜市営バスは、昭和3(1928)年昭和天皇の即位大礼式にあやかり11月10日根岸線(桜木町駅前～滝ノ下)間門線(磯子～間門)等7路線で運行開始。市営地下鉄は、昭和47(1972)年12月16日伊勢佐木長者町一上大岡間で開業、現在、市内11区と藤沢市(湘南台駅)に40駅2路線で運行されています。

水道局においては、料金収入の減少が続く中で経費の削減や資産の有効活用を進め、今後も安定した水道事業を継続していかなければなりません。交通局もバス利用者の減少など厳しい環境に迫られる中で自主自立の経営を目指しています。今年度は、そうした両局の取組みについてしっかりと検証し、持続可能な水道事業、都市交通のあり方について議論してまいります。